

標準化なくして、タスクシフトなし

西澤 延宏

(日本医療マネジメント学会評議員、
佐久総合病院・佐久医療センター外科医長)

佐久医療センターは、10年前に開院した高度急性期病院だが、開院時より、入院前支援をする部署として、患者サポートセンターを設置した。担当看護師が患者の入院前マネジメントを進めるとともに、医師事務作業補助者が、入院前の検査オーダーやバス入力を行い、管理栄養士が、食事オーダーをチェックして変更を提案するなど、タスクシフトにより、多職種で多様な業務を行っている。現在は、医師が入院適応と入院日を決めれば、後の入院関連業務は、ほぼ他職種対応である。

この取り組みは、幸いにも高い評価を得て、全国の病院から視察に来て頂いたが、最も、驚かれるのが、タスクシフトが進んでいることである。本院のスタッフにとっては当たり前のことを感心されるので、かえって戸惑うくらいだが、その秘訣は、「標準化」にある。

多くの病院では、医師・診療科ごとに同じ業務でも対応や指示が違うということが少なくないが、本院では、術前検査や睡眠導入剤・下剤の使用から、周術期の血糖管理や腎機能低下への対応など、全て標準化されており、院内統一となっている。

この多岐に渡る標準化は、2008年から始めた「佐久総合病院標準化プロジェクト」で作り上げたものだが、中心となった看護師長4人から頼まれ、小生がリーダーとなった。標準化を進めると、

物わがりのいい医師・部門は彼女たちが話せば協力してくれたが、協力をしづる場合は、小生の出番となる。会議で喧嘩し、酒席で話し、恫喝(?)し、あらゆる方策を使ったが、反発は予想以上で、院内のあちこちで、衝突が起き、「総論賛成。各論反対」を実感した。それでも何とか6年間で、プロジェクトは完了した。

同時期に、「標準化なくしてタスクシフトなし」をスローガンに、標準化できたところからタスクシフトを導入した。標準化により、個々の医師の直接の指示がなくても業務が進み、多くのタスクを無理なく、安全に他職種にシフトできた。また、タスクを引き受けることで、医師から感謝され、効率性・生産性の向上が図れることに、やりがいを感じて、積極的に取り組んでくれるスタッフも多かった。その結果として、想像以上にスムーズにタスクシフトが進められたのである。

標準化プロジェクト終了後、10年経過し、一緒に取り組んだ師長たちも、皆、定年となったが、いい思い出である。標準化は、いったん、できあがって慣れてしまえば、全く問題はなく、今の若いスタッフには、当たり前のことだが、それは、我々にはうれしいことである。ただし、「もう一回はやりたくないよね」というのが、共通の思いでもある。